

舌切りすずめ

楠山正雄

青空文庫

むかし、むかし、あるところにおじいさんとおばあさんがありました。

子供こどもがないものですから、おじいさんはすずめの子を一羽わ、だいじにして、かごに入れて飼かっておきました。

ある日おじいさんはいつものように山へしば刈かりに行って、おばあさんは井戸いどばたで洗濯せんたくをしていました。その洗濯せんたくに使うつかのりをおばあさんが台だいどころ所わすへ忘れていった留守るすに、すずめの子がちよろちよろかごから歩き出だして、のりを残のこらずなめてしまいました。

おばあさんはのりを取りとに帰かえって来きますと、お皿さらの中にはきれいにのりがありませんでした。そののりはみんなすずめがなめてしまったことが分わかかると、いじのわるいおばあさんはたいへんおこつて、かわいそうに、小さなすずめをつかまえて、むりに口をあかせながら、

「この舌したがそんなわるさをしたのか。」

と言いつて、はさみで舌したをちよん切ぎつてしまいました。そして、

「さあ、どこへでも出ていけ。」

と言いって放はなしました。すずめは悲かなしそうな声こゑで、「いたい、いたい。」と鳴なきながら、飛とんでいきました。

夕ゆう方がたになつて、おじいさんはしばを背せ負おつて、山かえから帰かえつて来て、

「ああくたびれた、すずめもおなかですいたろう。さあさあ、えさをやりましょう。」

と言いい言いい、かごの前まえへ行いつてみますと、中にはすずめはいませんでした。おじいさんはおどろいて、

「おばあさん、おばあさん、すずめはどこへ行いつたろう。」

と言いいますと、おばあさんは、

「すずめですか、あれはわたしのだいじなりのなめたから、舌したを切きつておい出だしてしま
いましたよ。」

とへいきな顔かおをして言いいました。

「まあ、かわいそうに。ひどいことをするなあ。」

とおじいさんは言いつて、がっかりした顔かおをしていました。

おじいさんは、すずめが舌を切られてどこへ行つたか心配でたまりませんので、あく
る日は、夜があけるとさつそく出かけていきました。おじいさんは道々、つえをついて、

「舌切りすずめ、

お宿はどこだ、

チュウ、チュウ、チュウ。」

と呼びながら、あてもなくたずねて歩きました。野を越えて、山を越えて、また野を越
えて、山を越えて、大きなやぶのある所へ出ました。するとやぶの中から、

「舌切りすずめ、

お宿はここよ。

チュウ、チュウ、チュウ。」

という声が聞こえました。おじいさんは喜んで、声のする方へ歩いていきますと、やが
てやぶの陰にかわいらしい赤いおうちが見えて、舌を切られたすずめが門をあけて、お迎
えに出ていました。

「まあ、おじいさん、よくいらつしやいました。」

「おお、おお、ぶじでいたかい。あんまりお前まえがこいしいので、たずねて来きましたよ。」

「まあ、それはそれは、ありがとうございました。さあ、どうぞこちらへ。」

こう言いつてすずめはおじいさんの手てをとって、うちの中へ案内あんないしました。

すずめはおじいさんの前まえに手てをついて、

「おじいさん、だまつてだいじなのりをなめて、申しわけがございませんでした。それを

おおこりもなさらずに、ようこそたずねて下くださいました。」

と言いいますと、おじいさんも、

「何なんの、わたしがいなかつたばかりに、とんだかわいそうなことをしました。でもこうしてまた会あわれたので、ほんとうにうれしいよ。」

と言いいました。

すずめはきょうだいやお友ともだちのすずめを残のこらず集あつめて、おじいさんのすきなものをたくさんごちそうをして、おもしろい歌うたに合あわせて、みんなですずめ踊おどりを踊おどって見みせました。おじいさんはたいそうよろこんで、うちへ帰かえるのも忘わすれていました。そのうちにだんだん暗くらくなってきたものですから、おじいさんは、

「今日はお陰で一日おもしろかった。日の暮れないうちに、どれ、おいとましましょう。」

と言つて、立ちかけました。すずめは、

「まあ、こんなむさくるしいところですから、今夜はここへとまっていらいっしやいな。」

と言つて、みんなで引きとめました。

「せつかくだが、おばあさんも待つているだろうから、今日は帰ることにしましょう。またたびたび来ますよ。」

「それは残念でございますこと、ではおみやげをさし上げますから、しばらくお待ち下さいまし。」

と言つて、すずめは奥からつづらを二つ持つてきました。そして、

「おじいさん、重いつづらに、軽いつづらです。どちらでもよろしい方をお持ち下さい。」
と言いました。

「どうもごちそうになった上、おみやげまでもらつてはすまないが、せつかくだからもらつて帰りましょう。だがわたしは年をとっているし、道も遠いから、軽い方をもらつてい

くことにしますよ。」

こう言っておじいさんは、軽いつづらを背負わせてもらって、

「じゃあ、さようなら。また来ますよ。」

「お待ち申しております。どうか気をつけてお帰り下さいまし。」

と言つて、すずめは門口までおじいさんを送って出ました。

三

日が暮れてもおじいさんがなかなかもどらないので、おばあさんは、

「どこへ出かけたのだろう。」

とぶつぶつ言っているところへ、おみやげのつづらを背負って、おじいさんが帰って来

ました。

「おじいさん、今ごろまでどこに何をしていたんですね。」

「まあ、そんなにおおこりでないよ。今日はすずめのお宿へたずねて行って、たくさんごちそうになったり、すずめ踊りを見せてもらったりした上に、このとおりにつづらをおみや

げをもらって来たのだよ。」

こう言つてつづらを下ろすと、おばあさんは急ににこにこしながら、

「まあ、それはようございませうねえ。いったい何が入っているのでしょうか。」

と言つて、さつそくつづらのふたをあけますと、中から目のさめるような金銀さんごや、宝珠の玉が出てきました。それを見るとおじいさんは、とくいらしい顔をして言いました。

「なにね、すずめは重いつづらと軽いつづらと二つ出して、どちらがいいというから、わたしは年はとっているし、道も遠いから、軽いつづらにしようといつてもらってきたのだが、こんなにもいいものが入つていようとは思わなかつた。」

するとおばあさんは急にまたふくれつ面をして、

「ばかなおじいさん。なぜ重い方をもらつてこなかつたのです。その方がきつとたくさん、いいものが入つていたでしょうに。」

「まあ、そう欲ばるものではないよ。これだけいいものが入つていれば、たくさんではな
いか。」

「どうしてたくさんなのですか。よしよし、これから行って、わたしが重いつづらの方

ももらつてきます。「

と言つて、おじいさんが止めるのも聞かず、あくる日の朝になるまで待たれないで、すぐにうちをとび出しました。

もう外はまつ暗になつていましたが、おばあさんは欲ばつた一心でむちやくちやにつえをつき立てながら、

「舌切りすずめ、

お宿はどこだ、

チュウ、チュウ、チュウ。」

と、いい言いたずねて行きました。野を越え、山を越えて、また野を越えて、山を越えて、大きな竹やぶのある所へ来ますと、やぶの中から、

「舌切りすずめ、

お宿はどこよ。

チュウ、チュウ、チュウ。」

という声がありました。おばあさんは「しめた。」と思つて、声のする方へ歩いて行きますと、舌を切られたすずめがこんども門をあけて出てきました。そしてやさしく、

「まあ、おばあさんでしたか。よくいらつしやいました。」

と言つて、うちの中へ案内をしました。そして、

「さあ、どうぞお上がり下さいませ。」

とおばあさんの手を取つておざしきへ上げようとしたが、おばあさんは何だかせわしそうにきよときよと見まわしてばかりいて、おちついて座ろうともしませんでした。

「いいえ、お前さんのぶじな顔を見ればそれで用はすんだのだから、もうかまつておくれでない。それよりか早くおみやげをもらつて、おいとましましょう。」

いきなりおみやげのさいそくをされたので、すずめはまあ欲の深いおばあさんだとあきれてしまいました。おばあさんはへいきな顔で、

「さあ、早くして下さいよ。」

と、じれったそうに言うものですから、

「はい、はい、それではしばらくお待ち下さいませ。今おみやげを持ってまいりますから。」

と言つて、奥からつづらを二つ出してきました。

「さあ、それでは重い方と軽い方と二つありますから、どちらでもよろしい方をお持ち下さいませ。」

さい。」

「それはむろん、重い方をもらつていきますよ。」

と言ふなりおばあさんは、重いつづらを背中にしよい上げてあいさつもそこそこに出ていきました。

おばあさんは重いつづらを首尾よくもらったものの、それでなくつても重いつづらが、背負つて歩いて行くうちにどんどん、どんどん重くなつて、さすがに強情なおばあさんも、もう肩が抜けて腰の骨が折れそうになりました。それでも、

「重いだけに宝がよけい入っているのだから、ほんとうに楽しみだ。いったいどんなものが入っているのだろう。ここらでちよいと一休みして、ために少しあけてみよう。」
こう独り言を言いながら、道ばたの石の上に「どっこいしょ。」と腰をかけて、つづらを下ろして、急いでふたをあけてみました。

するとどうでしょう、中を目のくらむような金銀さんごと思いの外、三つ目小僧だの、一つ目小僧だの、がま入道だの、いろいろなお化けがにらめつけるやら、気味の悪い

び出して、
「この欲ばりばあめ。」と言いながら、こわい目をしてにらめつけるやら、気味の悪い

舌を出して顔をなめるやらするので、もうおばあさんは生きて空はありませんでした。

「たいへんだ、たいへんだ。助けてくれ。」

とおばあさんは金切り声を上げて、一生懸命逃げ出しました。そしてやつとのことで、半分死んだようにまっ青になって、うちの中にかげ込みますと、おじいさんはびっくりして、

「どうした、どうした。」

と言いました。おばあさんはこれこれの目にあつたと話して、「ああもう、こりこりだ。」と言いますと、おじいさんは気の毒そうに、

「やれやれ、それはひどい目にあつたな。だからあんまりむじひなことをしたり、あんまり欲ばったりするものではない。」と言いました。

青空文庫情報

底本：「日本の神話と十大昔話」講談社学術文庫、講談社

1983（昭和58）年5月10日第1刷発行

1992（平成4）年4月20日第14刷発行

入力：鈴木厚司

校正：大久保ゆう

2003年8月27日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

舌切りすずめ

楠山正雄

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>